

筆すての松

今から千年ほど昔、現在の能見台の森の山のてっぺんの道端に能見堂と言う小さなお堂がありました。お堂から見える金沢の景色はとても素晴らしく、そこを通る人達は、そばに立っている松の木に寄りかかって景色を見ていると、あまりの美しさに心が洗われ、長い旅の疲れもとれ、元気が出ました。

ある時、その噂を聞いた巨勢金岡という絵描きさんが、評判の『世にも美しい景色』を描こうと思い、やって来ました。松の木に寄りかかって景色を眺めると、空は青く澄み渡り、近くの木々は緑に萌え、その木々の緑の間から見えるのは瀬戸の海。波はキラキラ輝き、海岸に並んで立つ美しい松。日暮れには夕日にそまる海の色など、評判どおりの美しさで、見ていると描くことを忘れる程でした。

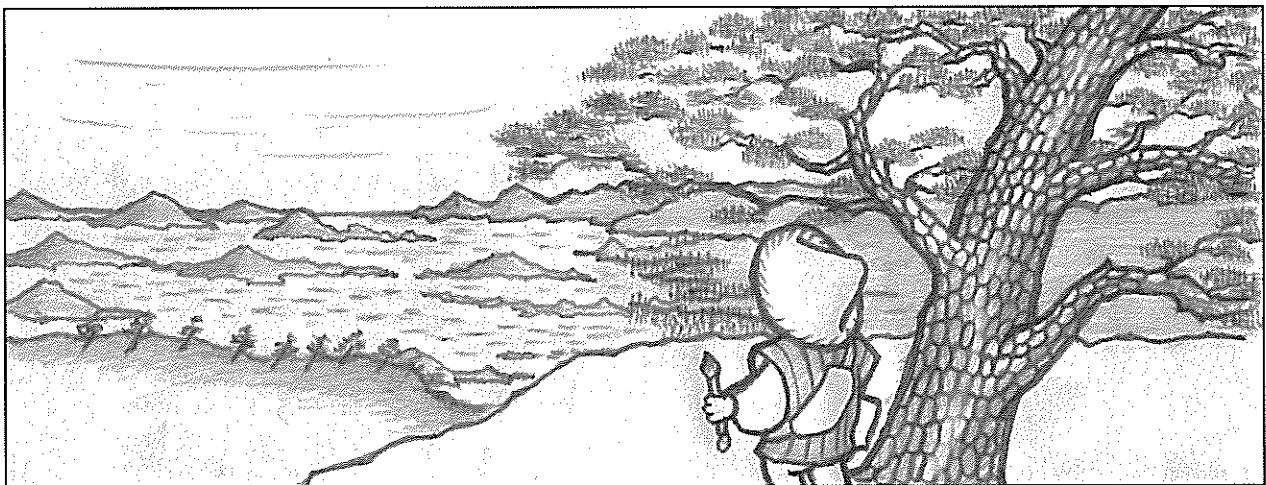
しばらくしてから我にかえった絵描きさんは、筆をとり、美しい海や山を眺め一生懸命に描き始めましたが、それがあまりにも美しすぎて、描こうとすればする程、筆は動かなくなりました。

それでも頑張つて、何度も描き直しましたが思うように描けず、とうとう手にしていた筆を松の木の下に投げすて立ち去ってしまいました。

それから、この松を『筆すての松』と呼ぶようになりしました。

それから、周囲3メートルもあつたという松の木は旅に疲れた人々の心を慰めるように大正時代まで立っていたそうです。

今では、その場所も笹がたくさん茂り、人もあまり通らず寂しくなっていました。『筆すての松』が立っていたらしき跡は今も残っています。



文 氏家 總子 (ふさこ)

絵 小泉 喜久江 (きくえ)